
翁な青年の異世界冒険記

亜狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翁な青年の異世界冒険記

【Nコード】

N5145Z

【作者名】

亜狸

【あらすじ】

97歳でこの世を去った老人が、死後の世界の主に頼まれ異世界へと旅立つ、老人には新たな体があたえられ、異世界ライフをのんびり、ゆっくり冒険していくお話。

作者はド素人で文才もありません。拙い文章ではありますが宜しくお願いします。誤字、脱字多いと思いますので、先に謝っておきます。

8話目、大幅(?)な修正を行っています。

1話 旅立ち

近畿地方の南部に位置する片田舎で、一人の男が天寿を全うしようとしていた。

彼の名前は中野 喜三郎、江戸時代から続く、剣術道場の38代目の主であり、世間では『最後の武士』などと呼ばれる程の人物である。

「思えばわしの人生、中々に楽しいものじゃったのう・・・」

道場については、お主に任せるからの、好きにすればいいわい」

喜三郎がそう言つと、彼の孫である孝彦が頷き、

「わかった、じいちゃん。あつちで婆ちゃんに会ったら宜しく言つといて」

孫がそう答えるのを見ると、喜三郎は嬉しそうに微笑むと静かに息を引き取った。

多くの門下生と、彼のただ一人の血縁者である孝彦は涙を我慢し、笑顔で『最後の武士』中野喜三郎の旅立ちを見送った。

「じじは、三途の河かの？」

喜三郎は、周囲を観察し、そう呟いた。

周囲には、この世のものとは思えないほど綺麗な花畑が地平線まで続いており、目の前には美しく大きな河があった。

河原には、泣きながら石を積んでいる小さい子供達、河を渡している船の周りに暗い顔をした人々が船に乗る順番待ちをしている。

「まさしく、といった感じじゃの、じゃあ、わしも渡し船に乗らんとつ。」

我が愛しの婆さんがきつと待ってくれているじゃろつて」

すると背後から、

「あー・・・」

と、若い女性の声が聞こえ振り返ってみると、そこには神々しい程の美しさの銀髪、銀目で綺麗な花柄の入った和服を着た少女が美しい笑みを浮かべ佇んでいた。

「ふむ、なにかの？」

喜三郎が答えると、銀髪の少女は用件を伝えようと口を開いた。

「中野 喜三郎様ですね？ 我が主が喜三郎様に伝えたい事があるとの事で、一緒に来て頂けませんか？ 私はこの『旅立ちの河』の管理人の花瑠璃と申します。

『旅立ちの河』とは、喜三郎様の国で言うところの三途の河にありえます」

花瑠璃が用件を伝えると喜三郎はやはり三途の河じゃったかと、納得した面持ちで返事をした。

「ふむ。此処の管理人の主となると、非常に身分の高い存在ではないのかのう？ そのような存在がわしに何のようなのかの？」

「そうですね、こちらの死後の世界では最も身分の高い方となりますね。喜三郎様の生前の輝かしい功績を見込んで、主が直にお伝

えしたい事があるとの事なので、ご協力下さいますようお願いします」

「輝かしい功績のう・・・」

まあ、そのような身分のものに招かれては、行くしかないのう。わしとしては、早く愛する婆さんに会いたいのが・・・」

「ご協力感謝します。 それでは私の船で、ご案内いたしますね」

花瑠璃は笑顔でそう返すと、少し落ち込んだ顔の老人の手をとり自分の専用の船へと案内した。

1話 旅立ち（後書き）

小説を読んでいくうちにどうしても書いてみたくなりました。拙い作品ですが、お付き合いして下さいると嬉しいです

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽（前書き）

なぜか謎の空白が出来るのはなんでだろう・・・

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽

喜三郎は花瑠璃の船に揺られながら、周りを漂う他の船に視線を向けていた。

「のう、花瑠璃さん、あれらの船は何処に行くのかのう？」

喜三郎の乗っている船は白いクルーザーのような大きな船で内装も見事なものであるのに対し、喜三郎が視線を向けている船は、真っ黒な小さな船であった為、疑問に思った喜三郎は花瑠璃に質問をしていた。

「あの黒い船は喜三郎様方で言う所の地獄へ向かう船になりますね」

花瑠璃は穏やかな笑みを浮かべたままそう告げると、説明を続けた。

「死者は生前の行いによって、行き先が変わるのですが、船の色はそういった行き先によって分けられています。『黒』は地獄へ償いに行き、『青』は転生をする為、『白』は天の国へ昇る為の船になります」

「ふむ、ならわしは天国へ行ける、と言う事か、婆さんもいたら良

いのう……」

「いえ……この船は白、と言っても特別なもので主が直接招待した方しか乗る事は出来ません。」

行き先は、主の宮殿に直接つながっております」

「ふむふむ、婆さんに会えるのはまだ先の事になるのかの……」

残念そうな顔をした喜三郎に、花瑠璃は暗い顔をして口を開いた。

「あのう……申し上げにくいのですが……」

花瑠璃が何やら申し訳なさそうな顔をしている事に気づいた喜三郎

「奥様は……その……既に転生されているんです……」

喜三郎は暫くその言葉を飲み込めず、頭の中でその言葉を繰り返していた。そして、ようやくその言葉の意味に気づいた喜三郎は絶句した。

「なん……じゃと、では婆さんには会えんのか……」

花瑠璃がさらに言葉を続けようとした瞬間、喜三郎は周囲にあった青い船に向かって跳躍し・・・ようとして花瑠璃に羽交い絞めにされた。

「ええい！離せ！離さぬか！！わしは婆さんの所に行くのじゃ！！」

「駄目です！あの船へのつたからとて奥様の所へ行けると限ったわけではありませんし、それに奥様は、すでに転生先で結婚されてます！..！」

花瑠璃から告げられた衝撃の事実には絶句する喜三郎、

「そんな・・・婆さん・・・生まれ変わっても一緒になろうと近いあった仲じゃったのに・・・」

年甲斐もなく涙を流しながら声にならぬ声を出しながら嗚咽していた喜三郎を余所に船は目的地に近づきつつあったのだが、涙を流しながら周囲まで暗くなっている、喜三郎に花瑠璃は声をかけれずにいたのであった。

2話 死後の世界の船とじじいの嗚咽（後書き）

何から何まで初心者な挙句、国語力なかったのも思い出しました。不快に感じた方の為この場で先に土下座しておきます。

3話 死後の世界の女王（前書き）

おおお、いきなり評価して下さいる事に感激いたしましたW
有難うございます！！

3話 死後の世界の女王

死後の世界の主である女王の宮殿で、喜三郎と花瑠璃は、宮殿の主を待っていた。

先程まで黒いどんよりとしたオーラを放ちながらブツブツと「ばあさんや・・・ばあさんや・・・」

と、女王を待つように通された部屋の片隅で呟いていた喜三郎も何とか持ち直した様子で、今は落ち着いた表情で、花瑠璃の対面のソファに腰を下ろしている。

「して、花瑠璃さんの主とは、どんな方なのですか？」

喜三郎は、やや待ちくたびれた、という顔で花瑠璃に問いかけた。

「私の主は上位の神で、この死後の世界を統べる女王『アリア』様と言う方で、非常にお優しく、美しい方ですよ」

自らの主を誇らしげな顔で説明をする花瑠璃、すると部屋の扉の方向から少し照れたような声がした。

「花瑠璃、身内をあまり褒めるものではありませんよ」

花瑠璃は、エヘへと照れた笑みを浮かべ、イスから立ち上がり、

扉の方へ立つ人物に、深いお辞儀をし

「申し訳ありません、女王様」

と、ニコニコ笑いながら謝罪した。

喜三郎も、イスから立ち上がり女王と呼ばれた者の方へ向き、お辞儀をする。

「どうも始めまして、私は花瑠璃の上司で、この死後の世界の女王を勤めさせて頂いているアリアと申します。以後お見知りおきを」

高い身分の神が、ただの人間の老人である喜三郎に丁寧な言葉使いで接して来たことに喜三郎は少し驚いた、喜三郎が今まで出会ってきた、高い身分の人間は碌なものでもなかったからである。

「これは、ご丁寧な有難う御座います。

女王殿下、とお呼びすれば、宜しいですかのう？」

「そんなに、改まった態度でなくて結構ですよ。

気軽にアリア、とでもお呼び下さい」

「ふむ、そうですか？ それではアリア殿、と呼ばせて頂きますよ。」

して、アリア殿はこのような老いばれに何か御用ですかの？」

アリア殿、と呼ばれる事に少し満足そうな笑みを浮かべていた女王は、本題を切り出した。

「そうですね、それでは立ち話もなので、どうぞお掛け下さい」

そういうと女王は、喜三郎の正面に腰を降ろした。

すなわち花瑠璃の隣であったのだが、当の花瑠璃は、よほど女王に心酔しているのか、何やら自分の世界に入り、ブツブツと何かを呟いている。

一人の世界に浸っている花瑠璃を見て少し照れたように苦笑いをし、女王は話だした。

「喜三郎様の暮らしていた世界は、現世と呼ばれています。

そして現世とは複数あり、現世で転生を繰り返した魂は昇華し、天の国へと昇り神となります。

こちらの死後の世界とは、それらを繋ぐ世界となります」

「ふむ、現世が複数あるとな？」

それは、わし等のいたような世界が複数あると考えれば宜しいかの？」

喜三郎は特に驚いた様子も見せず、女王に聞き返した。
その様子に女王は少し意外そうな顔をし、喜三郎に話を続けた。

「まさしく、そうなのですが、あの、驚かれないのですか？」

「ふむ？ 人間97年も生きておれば大抵の事にはすぐ馴染めるものじゃよ」

喜三郎は女王の質問に対し、ケラケラ笑いながら答え、

「では、話を続けてもらいますかのう？」

「ああ、そうでしたね。話の腰を折り、申し訳ありません。
数多ある現世は、輪廻転生を繰り返し魂を昇華させる場となるのですが、時折その流れから外れてしまう者がいるのですよ。」

喜三郎様には、数ある現世の一つへと赴いてもらい、その者達を討って頂いて、その者らの魂を死後の世界へと送り届けて欲しいのです」

「流れから外れる、とな、そのような人間が存在するののか？」

「いえ、人間ではありません、確かに元人間であった者もいるのですが、通常は喜三郎様方で言う所の 魔物、妖怪などと言った呼ばれかたをしている者達です」

「ふむ、魔物や妖怪とな？ にわかには信じられん話じゃのう、まあ神が存在すると言うのなら、おるのじゃろつがのう」

「ご理解が早く助かります、かの者らは、通常の方法で生命活動を止めても、魂が死後の世界に向かわず現世に留まり、そしてまた同様の存在として再生するのです」

女王の話聞いた喜三郎は少し腑に落ちない、という顔で、疑問に思った事をたずねた。

「ふむ、それならば、わしが向かったとて意味はなくないかの？」

女王は喜三郎の疑問に対し、花瑠璃をチラリとみると、

「花瑠璃、神器を持ってきてもらえますか？」

と、声をかけ、自分の世界に浸っていた花瑠璃は、「ハイ」と返事をする、名残惜しそうに女王の隣から立ち上がり、部屋から出て何処かへ向かっていった。

女王は花瑠璃が神器を取りに向かうのを確認すると、話を続けた。

「確かに通常の方法で、かの者らを討つたとしても、効果はありませんが、今から花瑠璃が持つてくる神器を使えば、かの者らの魂を死後の世界へと、送り届ける事が可能になります。

送り届けて頂いた魂は、地獄へと向かっていく事となります」

「ふむ、なるほどのう。しかし、わしのような年寄りに務まるかのう？」

それに、わしは婆さんと再会出来ん事がわかり『は〜とぶれいく中なのじゃよ・・・』

今の状態では、そのような存在に立ち向かえるとは思えんしのう」

少し遠い目をし、悲しげな表情で呟く喜三郎に対し、女王は答えた。

「喜三郎様には、この話を受けて頂いた場合、新しい体が用意される事になります。

あと、奥方様に関しては、喜三郎様に赴いて頂く世界に転生していただきますね。

既に結婚されてますが・・・」

驚愕した表情の喜三郎、その表情は驚愕から悲しみ、怒り、黒い笑顔へと変化していった。

そんな表情を見ていた女王は、少し戸惑いながら喜三郎を見てい

た。

(なぐに、婆さんが既に結婚していたとして、そんなものは小さな障害じゃ、愛は奪い取るものじゃからのう・・・相手の男を死後の世界に送った、としても・・・ふおっふおっふお)

喜三郎の黒い考えを理解したのか、女王は少し困ったように、喜三郎に声をかけた。

「必要のない殺生はなるべく控えて下さいね・・・」

喜三郎は女王に思考を読まれた事に、少し驚いたが、それより驚いたのが、「殺生はなるべく」とそれが罪深い事ではないかのよう

に答えた女王に対してだ。
気になった喜三郎が女王に尋ねてみた所、

「人の世の罪は、人の世の倫理感で処罰してもらうものですから・・・

我等神には神の倫理感で罪とみなされる事が、罪となります、たとえば先ほど、お話した『流れから外れたもの』などですね。

だからと言って嫉妬に狂った必要のない殺生はしないで下さいよ？」

喜三郎は内心で「チッ」と舌打ちをすると女王との話が大きく脱

線していた事に気づき、話の流れを元に戻そうと、女王に問いかける。

「では、新しい体を貰って、神器とやらを授けられ、わしの暮らし
ていた世界とは別の、婆さんが存在する世界へ行き、妖怪退治をす
る、と言うことじゃろうかの？」

女王は喜三郎の、言葉を受け、笑みを浮かべ、喜三郎のさっきま
での黒い感情は無視して話を続ける事にした。

「お話が早くて、助かります」

そう女王が返事をした所で、部屋の扉が開き、花瑠璃が、長い包
みを抱えて戻ってきた。

4話 神の尖兵（前書き）

3話大幅に追加してます。

申し訳ありません。

4話 神の尖兵

長い包みを抱えた花瑠璃は、女王に一礼すると、包みを喜三郎に手渡した。

女王は花瑠璃にお礼を言うと、花瑠璃に隣に座るよう促す。

再び女王の隣に座った花瑠璃は、再び顔を赤らめ幸せそうにしている。

「ふむ、拝見して宜しいかの？」

喜三郎が問いかけると、女王は頷き、喜三郎は包みをゆっくり開いていった。

包みの中には、一振りの日本刀があり、喜三郎は興味を示した。

「神器というものが、刀であったとは興味深いのう・・・
抜いてみても宜しいかの？」

「ええ、かまいません、今回の以来を受けていただいた場合、それは喜三郎様の物になりますし」

喜三郎は、鞘に収められていた刀をゆっくりと抜いた。

鞘から抜き放たれた刀は、その美しい刀身を白く輝かせていた。

「これは、なんとも、凄まじい刀じゃのう・・・
業物というのも憚られる程のものじゃな、しかも、刀身からは溢れんばかりの清浄な気が纏われておるの」

女王は喜三郎が刀に関心しているのを満足気に見つめて、女王は喜三郎に語りかけた。

「それは数百年前に天の国へと昇られた、村正という方が、天の国の金属で鍛えたもので、村正様の神気と、経験、さらに最上級の天の国の金属とが合わさった、最高レベルの刀剣となります。

そして、その刀は、邪気を払う性質があり、物質だけでなく、魔物や妖怪などの魂を切り裂く事が出来ます」

「なるほどのう、さすがは伝説の名工じゃな。
しかし、伝説級の村正殿の刀を使えるなど、剣術に携わるものとしては光栄の極みじゃの」

喜三郎は、さっきまで見惚れていた刀身を鞘に収めると満足気に言葉を発していた。

「では、引き受けて下さるんですか？」

女王は、先ほどの喜三郎の言葉を受け、ホッと安心した様子で喜

三郎に問いかけていた。

「うむ、婆さんがいる世界だしの、それに、このような上等な刀を振るってみたいと思わない方がおかしいわい。」

しかも『神』から直接、依頼されたとあれば、断る理由もなかる
う？？」

喜三郎は女王の依頼を受ける事にもはや、抵抗はない様子である。

女王は喜三郎に「感謝します」と礼をのべ、深々と頭を下げた。

「それで、新しい体とは、どのようなものじゃの？」

「そうですね、新しい肉体は、喜三郎様が受け持ちの現世に降り立った際に、与えられる事になりますので、その時のお楽しみ、と言
う事でよろしいですか？」

「うむ、構わぬよ。」

しかし、言語や、生活文化の違いなどは大丈夫なのかのう？
いざ、かの地に降り立って、言語が通じぬとなると我が愛しの婆
さんに、愛の言葉を呟く事も出来んからのう」

女王は喜三郎の言葉を苦笑いしながら聞いていた。

「言葉については私が与える祝福で解決出来ますので、大丈夫です。ただし生活文化などの違いについては現地で直に触れて覚えて下さい」

女王の言葉を聞き、ホッと胸をなでおろす喜三郎。

言葉さえ何とかなれば、生活文化の違いなどは、後でどうしてもなるか、と軽く考えていた所へ女王は説明を続ける。

「あとは、魔物や妖怪の魂を見る事が出来るようになっていきます。魔物などを通常の方法で生命活動を停止させたら、魂が浮かび上がりますので、その刀で切り裂いて下さいね」

と女王が、説明すると・・・
ふむ、と納得した喜三郎は、手の中にある刀を見つめながら呟いた。

「うむ、この年になって、新たに強いものと戦う事が出来るとは嬉しいのう」

その言葉を聞いた女王は、満足そうな面持ちで喜三郎に告げた。

「それでは、喜三郎様を765番目の『神の尖兵』として、今この場を持って任命いたします」

女王がその言葉を言うと、喜三郎の体は不思議な光に包まれた。

「これは・・・」

体の底から力が溢れてくるようじゃの・・・」

「喜三郎様の魂に、神の尖兵、と任命をしたので、喜三郎様の魂に私の祝福が与えられました。」

これで、完全に神の尖兵としての役割を請け負った事となります」

喜三郎は女王の祝福を受けた自分の手を開いては閉じたりしながら見つめ「なるほどのう」と女王に答えていた。

「それでは早速、喜三郎様の受け持つ世界へと案内したいのですが、よろしいですか？」

喜三郎は、

(ふむ、もともと分からん事だらけじゃしいう。まあ行けば何とかなるじやろうて)

と、深く考えずに女王に『よろしく頼む』と返事をしていた。

5話 新しい名（前書き）

このサイトの利用方法がイマイチつかめず四苦八苦しております。せめて謎の空白と謎の改行だけでも何とかなればなあ・・・とか考えられます。

さてこの拙い文章にお付き合いくださっている皆様、誠に有難うございます。

不快に感じる点や、誤字、脱字、国語表現などおかしな点などありましたら、お手数ですが、ご一報下さりますと、大変ありがたいです。

5話 新しい名

青い髪で、青い瞳の、黒い衣服に、日本刀を持った青年は森の中で呆けた様子で佇んでいた。

青年は突然の風景の変化に戸惑いつつ、周りを観察していると、一人の銀髪の少女が、青年の近くに倒れている。

「はあ……。わしの受け持つ現世に送るにしてもこう、何と違うか前振りとかないものなのかう、それに何故に花瑠璃さんまで一緒なのかの？」

そういつと、青い髪の青年は倒れている少女を見て、長いため息を吐いた。

「う……。うっん……。!!??」

銀の神に綺麗な和服を着た少女は目を覚まし、見慣れない森の中を見渡してから……

絶叫した。

「ええええええええ！？　なんで私が現世へいるんですか！？　ハッ！？　女王様、女王様は何処に！？」

何の説明もなく、現世へと飛ばされた花瑠璃は、半分パニックに陥りながら、女王の名を繰り返し叫んでいた。

そんな様子を見た青年も、いきなり気づいたら現世だった為、花瑠璃に掛ける言葉が見つからない様子である。

「うづうづ、ヒック・・・ 女王様あ・・・」

ついに泣き出してしまった花瑠璃、先ほどまで青年が見ていた様子でも、花瑠璃の女王への心酔ぶりは何え知れたので、青年は、さて、どうしたもののお？ と心の中で思案するのであった。

「とりあえず、アリア殿に連絡を取ることには出来ないのかなの？」

と、青年は現在泣きじゃくっている少女、花瑠璃に声を掛けた。

「貴方誰ですか！？ 私をどうするつもりなんですか！？ なんて女王の名前を知ってるんですか！？」

警戒心むき出しで、怒ったように青年に敵意むき出しの花瑠璃。そんな花瑠璃の対応に、困った様子の青年。

「…………お主、なかなか面倒くさい女子じゃのう」

青年は聞こえないほどの小さな声で呟いたのだが、花瑠璃には聞こえたらしく、怒った顔で青年を見上げていた。

「わしじゃ、喜三郎じゃ、お主と共に女王と話をしておったジジイじゃよ」

花瑠璃は少し考える素振りを見せると……

「ああ、喜三郎様！！ 喜三郎様がどうして現世に!？」

先ほど喜三郎と名乗った青年は、驚いた表情をしている花瑠璃の顔を、更に面倒くさそうな顔で先程までの女王との会談の様子を告げた。

「…………お主、聞いておらなんだのか？」

「……………」

沈黙で返事をする花瑠璃。

「ハア、凶星じゃったか・・・。

しかし、何故女王は、わしだけではなく、お主まで現世に遣わしたのかの？」

ややバツが悪そうに花瑠璃は、小さな声で返事をした。

「それは、おそらく、この場所は、私が神の末席に加わる前に過ごしていた現世の場所だからです」

沈んだ表情で、返事で答える花瑠璃に、喜三郎は納得した様子である。

「なるほど、お主がわしの『神の尖兵』としての案内人と言う事か・・・」

嫌そうに頷く花瑠璃、彼女は女王の意思は組めても納得はしていないのだろう。

すると、花瑠璃の懐から、美しい声が出た。

『相変わらず、ご理解が早くて助かります、喜三郎様
それと花瑠璃、あまり喜三郎様を困らせては、いけませんよ』

花瑠璃は、急いで懐を探ると、そこには手の平程の大きさの手鏡があり、花瑠璃は、その手鏡を大事そうに懐から取り出した。

声の主はこの手鏡であるらしい事を悟った喜三郎と、花瑠璃は、声の主に問いかけた。

「ふむ、アリア殿、せめてこう・・・、もう少し前振りとか合っても良かったんじゃないかのう？」

流石にわしでも混乱するんじゃないか・・・？

あと、先程の理解が早くて助かる、と言うのは、花瑠璃さんが、わしのこの現世での案内人と言う事で合っているのかの？ ちと見ていて可愛そうなのじゃが？」

「女王様ひどいですう〜！ せめて何かしらの説明があっても良いじゃないですか〜！」

『ええ、喜三郎様、花瑠璃がこちらの世界を案内してくれます。』

あと突然転送してしまった無礼をお許し下さい。

それと花瑠璃、事前に説明したら貴女断っていたでしょう？

喜三郎様に、案内人が必要だったのよ。

大丈夫、喜三郎様が、この世界にある程度慣れたら、帰ってきてもいいから』

「本当ですか！！ 約束ですよ女王様！！」

女王の言葉に、希望を見つげ出したのか、花瑠璃は明るい笑顔で答えていた。

結構ひどい事されとるのに単純な娘じゃのう、と、喜三郎は呆気にとられながら花瑠璃を観察していた。

『それと、最後になりますが、喜三郎様、そちらの現世での『名前』を授けようと思います。』

その世界での名前とは、そちらの世界に存在してしている証となりますので、お受けにならない場合、2、3日で魂ごと消滅する恐れがありますので、何卒お受けになって下さいますか？』

さらりと恐ろしい事を言っている女王。

「うむ、せっかく新しい命と身体を授かったのじゃ、新たな名前をつけてくれると言うなら歓迎するぞい」

『それでは・・・』

汝、神の尖兵に、死後の世界の女王アリアが、新たなる旅立ちを祝して、名を授けます。

汝の名は 「シグルス」

シグルスの進む道に幸福が舞い降りるよう、祈りを捧げます』

シグルスと呼ばれた青年は、声の主に対し、新たな名前を受け入れると、女王に感謝の意を述べた。

「うむ、新たな門出に、アリア殿のような高貴な方に名を授けて頂き有難き幸せですじゃ。

この名に恥じぬよう、アリア殿から賜った任務を必ずや達成してみせましようぞ」

「あとう、女王様？ 私は？」

とやや不満げに恐る恐る聞く花瑠璃。

『あら貴女、その世界での名前あるじゃない』

花瑠璃の意見は軽く一蹴され、花瑠璃は複雑な表情をしている。

『ではね、花瑠璃、いえもう「ルミア」と呼んだ方が良いかしら？
もうあまり通信できる時間が残ってないので、そろそろ失礼しま
す。』

これから暫くは連絡を取る手段がないので、シグルス様、ルミア、
二人で頑張ってくださいね』

そう言つと、先程まで女王の声がしていた鏡は割れてしまい、ル
ミアと呼ばれた少女は、何とも言えない複雑な顔をしていた。

一方、シグルスと呼ばれた青年は、これから始まるであろう冒険
と、愛する婆さん探しの旅に胸を膨らませていた。

5話 新しい名(後書き)

感想頂けたりしたら嬉しいです。

6話 嵐の前の静寂（前書き）

申し訳ありません。

5話までの話を呼んでいたら、かなり違和感があり、もともと決めていた設定に、その場の思いつきで話を付け加えてしまった為だと判断し、5話目までを、一部、修正しています。

大筋の話の内容は、変更していないものの、結構な数の修正を入れていきます。

自分なりに、変な違和感は少し薄らいだかな、と思っていますが、一度掲載した本文を弄くり回してしまい本当に申し訳ありません。

6話 嵐の前の静寂

シグルスは女王との通信が終わり、複雑な表情をしているルミアにこの付近の事をたずねていた。

周囲は木々で囲まれ、田舎と呼ばれていたシグルスの日本の故郷ですら見たこともないような太い木々、そして木々の葉や、近くの植物なども見たこともないような物ばかりだ。

森の奥から聞こえてくる動物の声も、シグルスには聞いた事もないようなものばかりである。

しかも、外気は少し肌寒く、夜になると更に冷え込む事も予想が出来た。

(これは確かに花瑠璃さんの案内がいるのう、少しばかり別の世界に行くという事を軽く見てしまったようだの。

花瑠璃さんには気の毒じゃが、女王に感謝せねばイカンの)

シグルスに先程質問されたルミアは、周りを見渡しながら答える。

「ここは・・・」

ルルの森と呼ばれている場所の、丁度、中心のあたりだと思いません。

ソコに生えている植物は、ルルの森の深い所にしか生えない香草の一種なので、おそらく間違いありません」

そう答えると、ルミアは暗い表情でシグルスに現在の状況を告げた。

「ここは危険な動物は出ず、食用の植物や木の実などは豊富にあります。

ただ、その為か野盗が良く出ることです。

しかも現在の太陽の位置から察するに、もうあと1時間ほど日も沈みますね。

ちなみに、この世界の一日は25時間単位で1日となり、380日で1年となります。

そして、この世界にもシグルス様の故郷のあった国の『四季』というものがあります。

現在の季節はシグルス様の故郷で言うところの『秋』といった所ですね。

この地方は夜になったら、かなり冷え込むと思われま。

正直、あまり良い状況とは言えないですね」

シグルスは暗い顔で語っているルミア対し、真剣な面持ちで自らの意見を述べた。

「日が沈むまで残り1時間しか無いのであれば人里を目指すのは無理そうじゃの。

野宿しか選択肢はなさそうじゃの。

夜にかなに冷えるのであれば、焚き火は焚かないわけには行かないさそうじゃし。

しかし、焚き木を焚けば野盗に気づかれる恐れがある、と言った所かのう。

そうなってくると、見張りと睡眠を交互に大体2時間交代くらいで行わねばならぬかのう。

あと、日没が近いのなら食べ物は今夜は諦めた方がよさそうじゃの……」

シグルスの意見を聞いた、ルミアは頷き。

「私も、それが最善だと思います。

明日、日が昇り次第、人里を目指して歩くのが良いかと思っています」

シグルスは頷きながらも、少し心配した様子でルミアに問いかける。

「うむ、しかし、花瑠……ゴホン！」

ルミアさんが、その格好で歩き回れるのかが、ちと心配じゃのう。

……」

ルミアと呼ばれた事に、少し複雑な表情をしたルミアであったが、直ぐに表情を戻し、シグルスの言葉に、答えていた。

「そうですねえ、この格好だと少しキツイかもしれませんが……まあ明日頑張って人里にいたら、動き易い服を調達することに

します。

体力には自身がありますので、まあ、なんとかなるでしょう・・・
と言うより、何とかしなきゃあならないですしね。

おそらく女王様が、死後の世界と同じ姿の身体と、衣服を与えてくれたんでしょうが・・・。

この状況ですとマイナスにしかありませんね」

問いかけられたルミアの服装は、綺麗な花の柄の入った和服で、足元はポックリである。

長時間の歩行に向かないのは明らかだ。

そうして一通り必要な事を話終えた二人は、日が沈むまで、あと少ししか時間が無いこともあり薪を探しに行った。

薪を集めて積み重ねた所でシグルスは火をおこす為の道具を持っていない事に気づいた。

その旨をルミアに伝えると、ルミアはクスリと笑うと「大丈夫ですよ」と答えていたので彼女が偶々その手の道具を持っていたのだらうと、シグルスはホツとしていた。

ルミアは、集めて来た薪に手をかざすと目を閉じて何かを呟くと、次の瞬間ルミアの手から炎が飛び出し、焚き木に燃え移ったのである。

「じりゃあ、驚いたのう」

先程ルミアが引き起こした現象を、興味深そうに観察していたシグルス。

「ふむ、体内の『気』を、そのように使う事が出来るとはのう・・・」

先程のルミアの体内を巡る『気』の流れを感じていたシグルスは、関心した様子で燃えている焚き木を見つめていた。

「普通もつと、驚くと思うんですけどね・・・」

ルミアは始めて見る現象にも、あまり動じていないシグルスに逆に驚かされた様子である。

「先程は説明を忘れていましたが、こちらの現世では魔力、シグルス様が言うところの『気』を、一定の手順で体内を巡らす事により『魔法』とゆう現象を引き起こす力が存在することが認知されています」

「ふむ・・・」

むしろ、武術や剣術を志す者が『気』を練る『臍下丹田呼吸法』の手順を複雑にしたような感じか？

まあ、もつとも、むしろが居た世界では、『気』を感じ取れる程の者はあまりおらんかったかの・・・」

ルミアは「流石ですね」と苦笑いをすると、シグルスの考察がほぼ正しいものである事を伝えると、自らが熾した焚き木の前に座り、シグルスも座るように促した。

「まあ、今日は色々な事がありましたか……。
これから暫くの間、宜しく願いますね。 『シグルス』様」

「うむ、こちらこそ宜しく頼む『ルミア』さん」

シグルスに、ルミアと呼ばれた少女はまた少し複雑な表情をしながら、答えていた。

「実は、その名前の時の自分には、あまり良い思い出がないんですよ……」

まあ、もう過去の事だから良いんですが……
女王様がつけて下さった『花瑠璃』という名を呼んで貰った所で、こちらの現世ではあまりにも変わった名前ですから仕方ないですね……

ああ、あと私の事は呼び捨てで呼んで下さいね、『シグルス』様」

「うむ、ではこれから宜しくの、『ルミア』」

改めて、挨拶を交わした二人は、お互いクスリと笑うと、立ち上がり、握手を交わした。

その後、二人で焚き木を囲み、他愛のない話などを重ねて行く内に、夜は更けていった。

1回目の睡眠を終え、シグルスは2回目の見張りを行っていた。

本当は、一人で寝ずの番をしても良かったのだが、おそらくそれを善しとルミアは言わないだろうと思い、交代制で睡眠をとる事を提案したのだ。

火に薪をくべながら周囲を警戒しているシグルスの隣では、とても可愛らしい寝顔で少女が寝息を立てている。

この、神の末席に席を置くという少女は、1回目の見張りの当番を終えると深い眠りについており、シグルスは、まだ少し幼さの残る少女の可愛らしい寝顔を優しい表情で見守っていた。

ふと、何かに気づいたシグルスは、目線のみで周囲を確認している。

その眼光は、先程まで少女に向けていた優しいものではなく、まるで別人ではないかと思わせる程に、冷たく、まるで研ぎ澄まされた刃のような鋭さだった。

（気配は4つか・・・）

シグルスは忍び寄る気配に警戒をしつつ、決して自分が気づいている事は悟られないよう気を配る。

シグルスとルミアがいる森は静寂に包まれていた・・・
まるで、『嵐』を警戒するかのようになん

6話 嵐の前の静寂（後書き）

すみません、一部の言葉の言い回しを修正しています。

あと「臍下丹田」を、「胚下丹田」と何を間違ったらこうなるのか分からないような間違いをしていました。

7話 狂気 (前編) (前書き)

え〜と、今回、次回と、かなり残酷な描写、性的な描写が2話に渡り展開されます。

それらが苦手な方は、戻るボタンを押して下さいね。

あと今回でる用語の説明しときます。

栗型：刀の鞘の上部のあたりの事だそうです。

柄頭：刀の持ち手の部分の先つちよの方だそうです。

小尻：鞘の先つちよの部分のことだそうです。

人中：鼻と口の間にある人体の急所です、殴られたら痛いそうです。

鳥兎：目と目の間の人体の急所です、どつかれたら痛いそうです。

霞：テンブルのことらしいです、叩かれたら痛いそうです。

7話 狂気（前編）

月の明かりも届かない深い深い森の中。

この4人の男達は、この森の周辺に出没する『野盗』の一味の下つ端で、先刻、野盗の頭領に命じられ、アジトである洞窟の周囲の警戒をしていた。

彼等の頭領や先輩達は今日の獲物から奪った『もの』で、『宴』を『お楽しみ』中のなのだろう。

4人の野盗の下つ端の男達は、おそらく今晚も『おこぼれ』には預かれないのだろうと、やる気もなさ気に周囲を見渡していたのだが、そこでシグルス達の焚き木の光を見つけたのである。

野盗の下つ端達は、この「野盗が出没する森」は、誰もが野盗を警戒し、野盗達に居場所がバレないように、焚き木などせず息を潜めて夜を過ごす事を知っていたのだ。

「おい見ろよ？ どこぞの馬鹿が俺達に襲われたいらしいぜ？ あんな目立つ所で焚き木なんてやってらあ。きつと世間知らずの阿呆がいるんだな」

男達の一人が、楽しそうに声を出し、下つ端仲間に知らせていた。

「おっ！ 本当だ。こりゃあきつと良いカモじゃねえか？」

「頭領に知らせに行ってくるか？」

「バアゝカ、こんな所で焚き木する奴なんぞ、ぜってえに大したことない奴に決まってるじゃねえか！」

軽く、焚き木している奴をぶつ殺して、俺達4人で戦利品を山分けしようぜ？」

もちろん、頭領には内緒でな。と付け加えると、男は下卑た笑いを浮かべていた。

残り3人は、その言葉を受け入れ、焚き木をしている、愚かな獲物を自分達だけで襲おうと、シングルス達の居る焚き木の方へ歩を進めていった。

彼等は焚き木の近くまで行くと、獲物に気づかれないよう、物音を立てずに獲物に近づき、木々の隙間から様子を伺った。

(うっひょゝ、女がいるぜ!! 守ってるのは、あそこの弱そうな兄ちゃんだけだ!!)

女は変な服着てるが、かなりの上玉だぜ)

(最高じゃねエか! どうせ服なんて?ぎ取っちまうんだしな!)

(へへへ、頭領達の『お楽しみ』に参加できなかったのが、かえってラッキーだったな!)

(おお、あの今日攫った娘より全然いいじゃねえか)

(やべ、鼻血出そう、うひひ)

男達は下品な笑みを浮かべ、小声で話し合っていた。

一方、野盗の気配に感じているシグルスは、男達の下世話な話に少々イライラしながら耳を傾けていた。

(あの者らは、会話から察するに、野盗達の使い走りじゃの・・・、大方、わしらの焚き木の光を見つけて、自分達のボスに内緒でここまで来たのじゃろう。組織だった偵察や襲撃ではないのなら、今ここで奴等を片付けても大丈夫であろう。

これ以上奴等の、汚い目線をルミアに向けられるのは不快じゃし、何より気になる事も言っておる)

男達の様子を探っていたシグルスは、行動を開始した。

シグルスは村正を左手に携え一瞬の内に男達の正面へと近づくと、村正の栗型をしつかりと左手で握り、下品な話をしていた男の「人中」へと村正の柄頭を突き出し、男の意識を刈り取っていた。

意識を刈り取られた男が倒れる前に、栗型を握っていた左手の少し下に右手を添えて、栗型を握っている左手を支点に右手を振りぬき、鞘の小尻のあたりで側にいた男の「霞」に打撃をあたえると、そのまま鞘の腹の辺りを握っていた右手を引き、栗型を握っていた左手を少し突き出して更にもう一人の男の「烏兎」に、柄頭を叩き込んだ。

3人の男達は自分が何をされたのかも分からず、3人同時に崩れるように倒れた。

痛みすら感じる暇もなかったらしく、その顔にはまだ下品な笑みが浮かんだままだ。

残った一人の男は狼狽しながら、意味がわからないといった表情で、先程倒れた3人の側に立つシグルスを見ていた。彼にはシグルスが何をしたのかすら視認する事が出来なかったからだ。

「おいお主！！」

お主には聞きたい事があったから、残してやったのじゃ！ わしの質問に答えよ！」

「なっ！ テメエ、俺の連れに何しやがったんだ！？」

シグルスは男の問いかけを無視し、先程の男達の会話の中に気になる言葉があったので、それを確認する為に声をかけた。

「先程のお主らの会話の中で、『攫った』だの『お楽しみ』だの言葉があった筈じゃ！」

誰かが囚われておるのか！！」

「ああん、なこと知ってどうするってんだあ？ へっ、今頃は頭領達がお楽しみだろうさ、あの娘もテメエの連れには劣るものの中々の上玉だったからなア。」

今頃は、精神がぶっ壊れて腰でも振り続けてんじゃねえかあ？」

「・・・攫ったのか？」

シグルスは、胸の奥底から湧き出る怒りを抑え低い声で問いかけた。

「へへ、今日の夕方に馬鹿な親子が、近くの街道に護衛もつけずに通ってた所を襲ってやったのさ。」

へへへ、目の前で両親が殺された、あの娘の顔ときたら傑作だっ

・ギヤアアアアアアアア！！

痛ええ！！　いてええええよおお！！」

シグルスは、男が最後まで喋る前に、村正を抜刀し、男の耳を切り落とした。

「案内してもらおうか・・・」

あと、己おれの前で、ふざけた口は慎め」

「ううう、イテエ、いてえよ・・・」

わかった、わかったから命だけは助けてくれよう・・・」

男はシグルスに切り落とされた耳のあった場所を押さえ、涙を流

しながら、シグルスをアジトまで案内するかわりに、命だけは助けて欲しいと嘆願している。

シグルスは、命乞いをする男を冷やかな目で一瞥すると、誰かも知らぬ少女の無事を祈っている。

ふと、ルミアの事が気になり、そちらにシグルスが目を向けると、怯えた顔のルミアがシグルスを見つめていた。

怯えた少女の顔を見て、シグルスは少し冷静さを取り戻したようで、先程、男を脅していた時のような口調ではなく、普段の口調でルミアに声を掛けた。

「今から、わしは少し出かけてくる。

申し訳ないがルミア、お主は此処で待っていてくれんか？」

「……私も一緒に行きます」

「先程の話を聞いておったのじゃろう？ 駄目じゃ、危険だし、それに……」

「シグルス様の……、おっしゃりたい事は理解できます。けれど私は『普通』の女ではないので、大丈夫です」

ルミアは、まだ少し震えているものの、凜とした瞳でシグルスを見つめている。

シグルスは、そんなルミアの様子を見て、渋々と同行を認めた。本当は連れて行きたくはなかったのだが、野盗に攫われた少女の事を考えると、今は一刻も時間が惜しい為、ルミアと押し問答している暇はない。

シグルスは目の前でガタガタと震えている男を無理矢理立たせ、道案内をさせた。

7話 狂気 (前編) (後書き)

戦闘の描写とは難しいものですね・・・

8話 狂気（後編）（前書き）

前回に引き続き、残酷な描写、及び性的な描写が本編中に含まれています。

そういったものが苦手な方は戻るボタンを押して下さいね。

また、今回のお話を見て下さった方で、極度の不快感など感じられた方がありましたら感想の方にご連絡下さい。

そういったご意見が多かった場合、7、8話の本編を別のものに差し替えます。

8話 狂気（後編）

野盗達のアジトである洞窟内で、少女は引き千切られた衣服の切れ端のみを身体に纏った状態で横たわっていた。

少女の口元には血の跡がついている、泣き叫んで喉の奥が裂け、血が噴き出してしまった為だ。また少女の身体には無数の擦り傷や痣が男達によってつけられている。

目の前で両親を殺された挙げ句に男達の慰みものとされ、執拗に蹂躪され続けた少女の心は憐れにも壊れてしまっていた。

涙の跡を残した顔には、もはや何の感情も浮かんでおらず、彼女は「お母さん、お母さん・・・」と、まるで壊れたスピーカーのように呟いている。

男達のリーダーは、そんな彼女を引きずり立たすと、彼女を洞窟内の手ごろな岩に縄で括りつけると仲間達に呼びかけた。

「おいオメエラ、今日の戦利品の分け前わかるぞ！！
コイツの身体を的にしてナイフ投げで分け前決めるからなあ！！
1位は金貨3枚だ！！」

「ひゃっほう！ さっすがボス！！ 太っ腹！！！」

「よゝし、そんじゃあ俺からいくぜ！！！」

そんな男達の言葉にもまったく反応を見せない少女。

男達は、残虐極まりない「遊び」を始めた。まるでダーツでも楽しむように、少女の体には何本ものナイフが突き刺さっていた。少女はナイフが突き刺さる度、小さく「うっ」と唸っていたが、その瞳には何の感情も浮かんでいなかった。

シグルスとルミアは、野盗の下っ端の男の後ろについて彼等のアジトへと向かって歩を進めていた。

野盗達のアジトはシグルスとルミアが焚き木を行っていた所から役1km程の所にあり、先ほど居た場所から大して時間をかける事もなく到着することが出来た。

野盗達のアジトは周囲を森の木々で隠すように覆われた場所であり、まさしく天然の隠れ家、といった風体である。

道案内がいなければ辿りつく事も出来なかっただろう。

洞窟の入り口が見渡せる場所まで到着すると、シグルスは険しい表情で洞窟の入り口を見つめ、焦った表情で、声を発した。

「血の匂いがする！！ 急ぐぞ！！」

そう怒鳴ったシグルスは、此処までの案内を勤めた野盗の下っ端に逃げられないように殴って気絶さすと、洞窟へと走り出した。

突然走り出したシグルスの後をルミアも追う。

すると、洞窟の入り口から少し入った所でシグルスは呆然と立ち止まっていた。

「くッ！ コレは・・・何という酷い事を・・・」

ルミアは彼の身体に遮られて、洞窟の中を見ることが出来ない。

ただ、シグルスが先程とは比べ物にならないほど怒っている事だけは背中越しでもハッキリとわかる。

それほどまでに強い怒気がシグルスを包み込み、彼の肩は怒りの感情によって震えていたからだ。

ルミアは、何故彼がそこまで感情を昂ぶらせているのかを確認するために中を覗こうとシグルスの右後方から身を乗り出した。

ルミアが洞窟の中を見ようとしている事を察知したシグルスは「見てはならん！」と叫んだのだが既に遅かった。ルミアは洞窟の中の凄惨な光景を見て固まっている。

ルミアが目にしたのは、無数のナイフが体中に突き刺さった全裸の少女だった……。

少女は既に絶命しており、その瞳には何も映していない。

異常なまでの怒気を放っていたシグルスは村正を抜刀すると、既に絶命している少女に、まだ飽き足らぬといった表情でナイフを投げつけようとしている男達の方へと向かい駆け出していた。

シグルスが駆ける姿はまるで閃光のようで、光が瞬いたと思った瞬間には野盗の男達の手や足などが散っていく。

シグルスは男達の命を『まだ』奪わぬよう注意しながら、男達の動きを封じる為に次々と男達の体の一部を落としていったのだ。

突如光が走ったかと思うと、自分や仲間達の手足が吹っ飛んでいく。そんな様子を見ていた野盗達は恐怖におののいた。

「ひ……ひいいいいい!!」

「ぎゃあああああああつああ!!」

「いてええつえ! いてえええよおお!!」

男達の悲痛な叫びが洞窟内にこだまする。

シグルスは男達全員の体の一部を切断することによって男達の動きを完全に封じた後、男達に怒気を孕んだ声で問いかけた。

「この少女をこのような目に合わせたのは何故だっ！？
首謀者は誰だっ！？」

男達には突如目の前にシグルスが現れたように見えた、突如目の前に現れた男の顔は怒りで悪鬼の如く歪んでおり、その手には血が滴る刀を携えていた。

そんなシグルスを目撃してしまった野党の男達の顔は、言い様のない恐怖と痛みで引き攣っている。

男達は一斉に自分達のボスの方へと視線を送る。

視線の先には、両足の足首から先がなくなり、恐怖に引きつった顔の男が居た。

先程まで、少女に非道な行いを指示していた人物である。

「貴様が、首謀者か？ 楽に死ねるなどと思うなよ？
死んだほうが遥かにマシだと思える苦しみを与えてやるっ」

シグルスはそう言うと、男の肩に村正を突き立てる。シグルスは、自身の顔を怒りと憎しみで醜く歪ませ、いびつな笑みを浮かべて男に刺した刀に強く力を込めている。

ルミアは、そんな彼の様子を怯えた表情で見守っている。彼女は、事の成り行きをただ見守ることしか出来ずにいたのである。

「ぎゃあああああああああ！……！！！」

た、助けてくれ！！ おおお俺がアンタに何したっていうんだ！

？ 金か！？ か、金を払えば良いのか！？

金ならある、き、金貨50枚で、どど、どうだ？ だ、だ、だ、だから見逃してくれよおおお

野盗達のリーダーは情けなくも失禁しながら何とか命乞いをしていた。

シグルスは、そんな彼を侮蔑を込めた目で睨むと言葉を続けたのである。

「何をしただ？ わからんのか？ だったらあの少女はお前に何をしたと言うのだ？

何をすれば、あのように踏みにじられねばならんのだ？」

シグルスはそう言うとき今度は、目の前で命乞いをしている男の股間に村雨を突き立てた。

「ぎゃああああああああつあああああ……！！！」

お、お願いします！ 許して下さいいいいい！！ な、なんでもしますからあ……！！！」

男達のリーダーは、涙と小便を流しながらシグルスに命乞いをしている。

涙を流して命乞いをしている男の部下達は、シグルスの行っている事を、恐怖に震えながら見守っていた。

「その少女も、お前等にそうやってお願いしたのではないか？
それをお前等はどうしたんだ？」

そう言うと男に突き立てていた村正をグリグリと捻るシグルス。
あまりの恐怖と痛みに、野盗のリーダーは白目を向いて泡を吹きながら気絶した。

「気を失ったか・・・、後が悶^{つか}えている事だし、止めを刺してやる
う」

シグルスは身体に赤黒い『気』を纏わらせ、村正を高く構えると、その刃を振り下ろそうと村正を握る手に力を込めた。

先程から動くことが出来出来ずにいたルミアは「ハッ」と我に返った。

野盗のリーダーに止めを刺そうとしているシグルスの体が赤黒い『魔力』に覆われていたからだ。

ルミアは震える自分の足を叩くと、シグルスと野盗のリーダーの間
間に飛び込んだ。

シグルスは目の前の男に止めを刺そうと、振りおろしかけた手を止めた。

自分の前に銀髪に銀目、白地に綺麗な花柄の入った和服を着ている見知った少女が両手を広げて立ちふさがったからだ。

少女は、恐怖に震える心を必死に押さえつけながらシグルスに語りかけた。

「なりません！ 喜三郎様！ 憎しみに囚われて『狂気』に身を任せではなりません！！」

「どけ！ ルミア！ 邪魔だ！」

目の前で自分の行いを邪魔しようとする少女に、シグルスは怒気を込めて答えていた。

少女は目の前で赤黒い『魔力』を纏っているシグルスに一瞬怯んだが、それでも言葉を続ける。

「退きません！！ どうしてもと言うのであれば・・・私ごと切り捨てて下さい！！」

ルミアは必死に言葉を紡ぐ。

そんな彼女に苛立った様子のシグルスはルミアを睨みつけると声を張り上げ怒鳴るように言葉を発した。

「くっ！ なぜだっ！？ なぜこのような男達を庇う！？
これでは、これではあの少女が惨め過ぎるではないかっ！？」

「別にその男を庇っている訳ではありません！

シグルト様の『娘様』の事件も存じておりますので、強く怒りしている理由もわかります！！

ですが！ ですがっ！ シグルト様を『狂気』にとりつかせる訳には行かないのです！！

70年前のご自身にお戻りになられる気ですか！？ 奥方様に闇より救われた魂を、また再び闇に落としてしまっおつもりですか！
？」

そこまでルミアが語ったところで、シグルスは我に返った。

徐々に冷静さを取り戻すシグルス。その体に纏わりついていた赤黒い『気』は、シグルスの体から抜けて行った。

「すまん……。婆さんとの約束を忘れてしまっ所だった、感謝する……」

「いえ、私だつて彼等の行いには、正直憤つておりました。殺してしまつた方が良くとも思っていました……」

しかし、我等「神に属する者」は、『狂気』に取り憑かれる訳には参りませんので、悔しい気持ちはありますが、此処は、この国の法に任せる事といたしましょう」

「そう、じゃの、しかし、彼等は放っておいても死ぬのではないか？」

即致命傷の場所は避けたが、このままでは「法」に任せる前に失血死、するのではない、かの？」

シグルスは、未だ口調を切り替える事が出来ていないのか、変にとりながら話をしている。

「それは、私が解決いたしましょう」

『凍れ！！』

「「「ぎゃああああああああああああああああああ」」」

ルミアが短くそう言って手を振りかざすと、男達の失った手や足といった場所が凍りついた。

男達は、また恐れ慄くと、叫び声を上げた後、洩らす事なく全員気絶してしまったのであった。

「それはそうと・・・、この少女の身体をを綺麗にして、埋葬してやりたいのじゃが・・・
手伝ってくれる、かの？」

シグルスは手に握っていた村正を血払いし、鞘に収めながらルミアに声を掛ける。

ルミアは頷くと、シグルスの方へと歩み寄っていった。

8話 狂気（後編）（後書き）

今回のお話を見て下さった方、感想など頂けましたら嬉しいです。

こういった表現は不快であると言ったご意見が多かった場合、7、8話は差し替えますので。

11月23日、一部の言葉の言い回しや、言葉使い、あと説明不足だったところを修正しています。

9話 輪廻転生の流れから外れた者（前書き）

え〜と、私の拙い作品を読んで下さっている皆様、まことに有難う御座います。

8話の本編をまた大きく修正してしまっております。 修正多くてすみません。

あと野盗と言つ言葉が『野党』になっていた事にも気づき、修正しています。

馬鹿な作者で申し訳ありません！ 森の中に野党、すなわち議員さん達がいたらビックリしますよね〜・・・。

9話 輪廻転生の流れから外れた者

シグルスとルミアは、野盗達に殺されてしまった哀れな少女を、せめて綺麗な姿で「死後の世界」へ送り出してやるうと思いい、未だ岩に括り付けられているままの少女へと近づいていったのだった。

無数のナイフが突き刺さっている少女の近くへと歩を進めたシグルスは、その身体に巻きついていていた縄を解くと少女を優しく抱きかかえ、野盗達が使っていたであろう莫塵を引いただけの寢床へと彼女を寝かした。

シグルスは少女に刺さっていたナイフを全て抜くと、彼女の体を拭く為のものがなく探してきて欲しいとルミアに声をかけていた。ルミアは頷くと付近にあった空の桶を拾い上げ、魔法で水を溜めると自身の懐からハンカチを出し、水に浸した。

「少し冷たいけど、我慢してね」

ルミアは既に息絶えた少女に声を掛けると、彼女の身体を拭こうとしたのだったのだが、そこで少女の身体に異変が起こったのである。

既に息絶えていた少女の体が淡い光に包まれたかと思うと、少女の体の中から魂が抜け出てきたのだ。少女の魂は、俯いたまま何かを呟いている。

暫くすると、少女の魂に変化が現れ、少女の魂から『紅い魔力』が発生し、彼女の周囲を竜巻のように纏わりつき始めたのだ。その様子に一早く気づいたルミアは、慌てた様子でシグルスに声を掛けようと叫ぶ。

「シグルス様、彼女から離れて！」

竜巻のように回転する魔力は、少女の魂とその体を飲み込みながら少しずつ色を変えていつている。

最初は赤よりも赤い紅だった魔力は、現在は限りなく黒に近い赤色をしていた。

ルミアの叫び声を聞いたシグルスは後方に下がろうとしたのだが間に合わず、シグルスは少女の魂の周りに渦巻いている『気』によって、はるか後方に吹き飛ばされてしまい、洞窟の中で隆起している岩に背中をぶつけたのである。背中を強かにぶつけたシグルスは血反吐を吐きながら立ち上がろうと、村正を杖がわりに身体を支えて痛む体を無理矢理起こそうとしている。

ルミアは吹き飛ばされたシグルスに駆け寄り、シグルスに肩を貸して彼を立たせると回転する『魔力』の方へと視線を向ける。

「アレは、いったい何なのじゃ・・・、何が起きているのじゃ？」

シグルスはルミアに肩を貸して貰い、なんとか立ち上がって少女の魂の方を見やる。

少女の『気』は、既に完全に漆黒へと変化し、もはや『気』の渦

の中心にある少女の亡骸と魂は視認する事が出来ないほどに、濃い色をしている。

「彼女の魂は、『狂気』に完全に取り込まれてしまったようです。魂や神に属するものといった霊的な存在は『狂気』に取り憑かれると『輪廻転生の輪から外れた存在』となってしまうのです……」

ルミアは沈痛な面持ちで唇を噛み締めながら悔しそうに言葉を続ける。

「『ああ』なってしまうってはもう、どうする事も出来ません。シグルス様の刀で、死後の世界へ送り出してあげて下さい……」

ルミアの言葉を聞いたシグルスは絶句している。

「わしに……あの憐れな少女を斬り捨てる、というのか……？」

シグルスは悲しみに満ちた目でルミアに問いかける。

「そうです。彼女の魂を狂気から開放してあげる事こそが、彼女の魂にとって唯一の救いとなるのです」

ルミアは悲しみと苦しみに満ちた目でシグルスに答える。

「わしが斬った「流れから外れた者」は地獄へと誘こよわれるのであるう？ あまりにも少女に救いがなさすぎるのではないか？ 少女を殺した男達は生かされ、仮に法によって生命を奪われたとしても死後の世界で裁かれる事はないのであるう？ なぜ少女の魂だけが地獄へ行かねばならんだ……」

ルミアに肩を貸してもらい立っていたシグルスは、彼女から離れると憐れな少女の魂の方へと目を向ける。少女の周りを回転している『漆黒くろくい気』は禍々しい気配を放ちながら少女の亡骸と魂を包み込んでいるままだ。

「ですが、シグルス様が少女を斬らなければ、『狂気』に飲まれた彼女の魂は多くの者の命を奪う事になります。 そうなれば『狂気』は『狂気』を呼び、また新たな『輪廻転生の流れより外れた者』を誕生させてしまう事に成ってしまいます」

ルミアがそう語った所で竜巻のような渦を巻いていた『漆黒の魔力』は突如、はじけた。

漆黒の気かはじけた事により、爆風が巻き起こり周囲の物を吹き飛ばしていく。

シグルスは痛む体で爆風に耐え、ルミアを庇うように爆風によつ

て飛来する物に背を向け、ルミアを抱きしめていた。

そうして爆風が収まり、シグルスとルミアが漆黒の気があった方へ視線を向けると、そこにはかつて少女であった『異形の者』が佇んでいた。

八本の鱗に覆われた手に、蛇の下半身を持つ過去に少女であったモノのは、鱗に覆われた顔で怒りの表情を浮かべて、強い殺気を放っていた。

『ガアアアアアアアアッ！！』

元少女であった魔物は咆哮をあげ、シグルスとルミアに向かって攻撃を始めた。シグルスは先程から抱きしめていたルミアを抱え、後方へと跳躍し、魔物の攻撃をかわす。

ちなみにルミアの魔法を受けて気絶させられていた野盗達は、先程の爆風で洞窟の奥のほうまで吹っ飛ばされていた為、元少女であった魔物に狙われずにすんだようである。

シグルスは抱えていたルミアの体を離すと、魔物の方へと向き直り村正を抜刀した。

「やるしか・・・、ないようじゃの」

シグルスは村正を胸の前で垂直に掲げると身体を少しひねり、左足に重心を乗せて構えた。

二の太刀要らずの『示現流 蜻蛉』の構えである。

彼は元少女であった魔物を少しも苦しめる事なく絶命させる為に、この「一撃必殺」の構えを取ったのであった。

シグルスの精神は研ぎ澄まされ、先刻野盗達に向けていた『狂気』とは異なる白い清浄な光が漂う『気』を身体に纏わせていた。

そんなシグルスを見つめていたルミアは彼に「少女の魂を解き放つてあげて下さい」と声を掛けると、後方へと下がり、彼を見守っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145z/>

翁な青年の異世界冒険記

2011年12月24日12時10分発行